

**国際バカロレアPYP認定校「音楽」の授業における
概念理解へと導くための手法とその効果**
——ブルースを題材にした音楽づくりに関する事例分析を通して——
Methods and Effectiveness in Leading Students to Conceptual Understanding in
"Music" Classes at International Baccalaureate PYP Accredited Schools:
Case Study of Creative Music Making from Blues

稲 生 涼 子
INO Ryoko

キーワード：国際バカロレア，PYP 認定校，概念，音楽

1. 研究の背景と目的

国際バカロレア（International Baccalaureate，以下IBと略記）は，国際的な視野をもつ人を育成することを目標とし，「IBの学習者像」を掲げて設計されている国際的な教育プログラムである¹。「IBの学習者像」は，探究する人，知識のある人，考える人，コミュニケーションがとれる人，信念をもつ人，心を開く人，思いやりのある人，挑戦する人，バランスのとれた人，振り返りができる人と設定されており，IBに認定されている学校では，この学習者像への接近が目指されている（IBO 2017, pp.4-5）。中でも3歳-12歳を対象にしたプライマリー・イヤーズ・プログラム（Primary Years Programme，以下PYPと略記）では，児童が5つの基本要素（「概念(Concepts)」，「知識(Knowledge)」，「スキル (Skills)」，「姿勢 (Attitudes)」，「行動 (Action)」）を習得し，「IBの学習者像」へと接近することで，国際的な視野をもつ人の育成を実現すると定められている（IBO 2018, p.6）。

PYPでは，表1に示した「教科の枠をこえたテーマ」のうち，1つを基に単元が計画される（同前, pp.13-15）。児童は，「教科の枠をこえたテーマ」において「概念」を探究して理解し，「知識」，「スキル」，「姿勢」を習得するようになっている（同前, p.19）。そして，これらの要素の習得状況が「行動」に表れるとともに，児童は「IBの学習者像」に沿って成長する（同前, p.12）。本稿では，「教科の枠をこえたテーマ」が設定された各単元において，これら5つの基本要素を習得し「IBの学習者像」へと接近する仕組みをPYPのメカニズムと呼ぶ。PYPの認定を受けている学校（以下「PYP認定校」と表記）では，このPYPのメカニズムに沿って，「概念」の理解を目的とした指導を行うことが推奨されている（同前, pp.18-19）。

表1 教科の枠をこえたテーマ

- | | |
|------------------------|------------------------|
| ・ 私たちは誰なのか。 | ・ 私たちはどのような場所と時代にいるのか。 |
| ・ 私たちはどのように自分を表現するのか。 | ・ 世界はどのような仕組みになっているのか。 |
| ・ 私たちは自分たちをどう組織しているのか。 | ・ この地球を共有するという事。 |

近年、日本では、国際バカロレアを導入する学校が増えてきている。この背景には、政府が国際教育の推進を目的としてIBの認定を受ける学校（以下、IB認定校と呼ぶ）の増加を目指す動きがある²。IB認定校には、純粋にIBのみで指導が行われるインターナショナルスクールなどを含む「各種学校」と、学習指導要領とIBとの併用が求められている「一条校」がある。学校教育法第1条で規定されている一条校がIB認定校になるためには、学習指導要領が定める各教科等の目標、内容と国際バカロレアのプログラムの目標、内容を比較し、両方を適切に取り扱えるよう教育課程を工夫して編成・実施することが求められる³。だが、初めてPYPの認定を受けた一条校の小学校ができたのは、2018年⁴と日が浅く、一条校においてPYP認定校の小学校は7校と少ない（2022年6月30日時点）⁵。そのため、一条校として定められているPYP認定校で勤務する教師は、PYPと学習指導要領をどのように併用していくのかという課題に対し、PYPに基づく指導の蓄積を持つ各種学校の実践を参考にして授業開発に取り組んでいる現状にある⁶。その際、教師は、PYPのメカニズムに沿った授業開発を促進させるために、概念の理解へと導く手法とその実際の効果を理解することが前提となる。

PYPにおいて扱われる教科は、「言語」、「社会」、「算数」、「芸術」、「理科」、「体育」である⁷。そして、「音楽」は、「芸術」に含まれている（同前, pp.144-148）。「芸術」は、表1の「教科の枠をこえたテーマ」の中でも「私たちはどのように自分を表現するのか」もしくは「世界はどのような仕組みになっているのか」に特に高い親和性があるものとして、国際バカロレア機構（International Baccalaureate Organization, 以下IBOと略記）から図示されている（同前, p.66）。

PYP認定校における「音楽」については、プログラムの観点からこれまで小学校段階に焦点を当てた研究が進められてきた（安江・松永2016）（安江2017）（稲生2019）。一方、PYPのプログラムに基づいた実践については、学術的な報告・分析が十分でない現状にある。今後、一条校において国際化へと対応できる人材を育てることを目標とした小学校音楽科の授業開発を推進するには、実践の観点からのPYPのメカニズムを明らかにすることが必要となる。具体的には、PYPに基づく指導の蓄積のある「各種学校」を対象に、「音楽」の授業におけるPYPのメカニズムに沿った概念の理解へと導く手法とその実際の効果について、実践事例の分析を通して明らかにするという研究を量（実践事例の数）と質（基となる「教科の枠をこえたテーマ」の選択や単元の設計方法の多様性）ともに充実させていくことが必要である。

教科「芸術」と特に親和性があるIBOより図示されている前述テーマ（「私たちはどのように自分を表現するのか」、「世界はどのような仕組みになっているのか」）のうち、前者（「私たちはどのように自分を表現するのか」）に関しては、分析が試みられているところである⁸。後者（「世界はどのような仕組みになっているのか」）も含めて、今後、様々な実践の蓄積が期待される。その一方、残りの「教科の枠をこえたテーマ」（「私たちは誰なのか」、「私たちはどのような場所と時代にいるのか」、「私たちは自分たちをどう組織しているのか」、「この地球を共有すること」）を基にした「音楽」の指導についての実践研究については、管見の範囲ではみられない。

このような状況を踏まえて、本研究では、まだ日本での研究が報告されていない「私たちは誰なのか」と関連させた「音楽」の授業を取り上げ、PYPのメカニズムに沿った概念の理解へと導く手法とその実際の効果について明らかにする。そのために、PYP認定校における授業事例を参与観察し、教

師の指導言を中心に分析を行う。

2. 5つの基本要素の概要

PYP「音楽」の授業における概念の理解へと導く手法とその実際の効果を詳らかにするためには、概念も含めた5つの基本要素の性質と相互の関係性を踏まえ、実際の指導内容と対応づけて考えていくことが有効である。そこで、本研究においても前提事項となる5つの基本要素の概要について、カリキュラム作成のための手引書である「PYPのつくり方：初等教育のための国際教育カリキュラムの枠組み」に基づいて示す。

5つの基本要素のうち、「概念」は、特徴 (Form)、機能 (Function)、原因 (Causation)、変化 (Change)、関連 (Connection)、ものの見方⁹ (Perspective)、責任 (Responsibility)、反省¹⁰ (Reflection) から構成されている (IBO 2018, pp.18-23)。

「スキル」とは、社会的スキル (Social skills)、コミュニケーションスキル (Communication skills)、思考スキル (Thinking skills)、リサーチスキル (Research skills)、自己管理スキル (Self-management skills)、に分類される (同前, pp.23-27)。

「姿勢」は、感謝 (Appreciation)、根気 (Commitment)、自信 (Confidence)、協調 (Confidence)、創造性 (Creativity)、好奇心 (Curiosity)、共感 (Empathy)、熱意 (Enthusiasm)、自主性 (Independence)、誠実 (Integrity)、尊重 (Respect)、寛容 (Tolerance) から構成されるものである (同前, pp.28-29)。しかし、必ずしも児童に対して特定の姿勢の獲得を狙って指導することは求められていない。児童自身が自分の周りの世界において価値ある姿勢とされているものを認識すること、そして自分でそれらの姿勢をはっきりと表現できるようになることが、「学習者像」の考え方に沿った成長へとつながっていくと考えられている (同前, p.6)。

「知識」に関しては、具体的な構成要素は明示されていないが、児童のこれまでの経験と理解を踏まえた上で、児童に探究し知ってほしいと私たちが願う、重要性が高く児童自身との関連性の高い内容と位置づけられている (同前, p.12)。概念を用いる教科の枠をこえた単元は、児童が理解を深め、同時に基本的な知識、スキル、姿勢を習得することができる文脈を提供すると示されている (同前, p.19)。このことから知識は、スキルや姿勢と共に概念の理解を通して習得されるものであると解釈できる。

「行動」は、他の基本要素の実践の結果として表れるものとされている (同前, p.12)。これは、「選択 (Choose)」、「実行¹¹ (Act)」、「振り返り (Reflect)」から構成され、「PYPのつくり方：初等教育のための国際教育カリキュラムの枠組み」にこれらが「行動のサイクル」として図示されている (同前, p.30)。しかし、行動を取らないということも妥当な選択の1つであり、時には、行動をとらないことが最善の選択であることもある (同前, p.29)。

3. 実践事例の概要と調査の方法

本研究で調査・分析の対象とするのは、Aインターナショナルスクールにおける授業事例である。当該校は、IB導入を試みる学校への支援を文部科学省から依頼されており¹²、PYPに基づく指導の蓄積をもつ各種学校の一つである。ここでは、授業事例の概要について本研究における調査方法とともに

に述べる。

3. 1. 参与観察

先述した通り「教科の枠をこえたテーマ」は、各教科、各分野もしくは、教科横断的に探究される。本研究では、「教科の枠をこえたテーマ」の中でも許可が得られた時期に実施された「私たちは誰なのか」に基づいた小学4年生を対象とした「音楽」の単元を取り上げる。参与観察した回数は、単元が実施された計10回の授業のうち、許可が得られた2022年1月14日（金）から4月1日（金）までの時期に実施された計9回である。観察したクラスの人数は、17名である。単元における主な学習内容は、グループごとにブルースを題材としてウクレレや打楽器を用いて音楽をつくることである。

第1回から第5回および第6回から第10回（観察したのは第9回まで）までの主な指導内容は、表2のとおりである。

表2 本単元のねらいと主な指導内容

ねらい：ウクレレの奏法の習得	
1	ウクレレの調弦方法とコードCの奏法
2	ブルースのコード進行について
3	コードCの奏法に関する復習，コードFの奏法，コードFからコードCへの変換
4	コードFからコードCへの変換に関する復習，コードC7の奏法，コードAmの奏法
5	コードFからコードCへの変換に関する復習，コードGの奏法，コードCFGCの変換
ねらい：習得したウクレレの奏法を活かして，他の楽器にも取り組みながらグループでブルースを題材にした音楽をつくる	
6	グループごとでのブルースの歌詞制作について
7	グループごとでの楽器の奏法について
8	グループごとでの楽器の奏法について
9	グループごとでの楽器の奏法について
10	発表と振り返り（この回の参与観察の許可は得られなかった。）

第1回から第5回までの授業では、ウクレレの奏法の習得がねらいとなっており、第6回から第9回までの授業では、習得したウクレレの奏法も活かして他の楽器にも取り組みながらグループでブルースを題材にした音楽をつくるのがねらいとなっている。そして、第10回の授業では、グループでつくった音楽の発表や本単元の振り返りを行うという内容になっている。

3. 2. 半構造化インタビュー

本研究では、参与観察に加えて音楽の授業における指導意図と課題について、教師に半構造化インタビューを実施している。半構造化インタビューでは、「本単元で設定された『概念』と具体的な到達度の考え方」、「本単元の課題」について聴取している。インタビューのトピックは、表3-①の通りである。なお、表3-②に記した章および節は、インタビュー結果に基づいて論じている箇所である。

表3 インタビューのトピック

①トピック	②本稿で結果を記した箇所
本単元で設定された「概念」の具体的な到達度の考え方	4. 1.
本単元の課題	7.

4. 本単元で設定された「概念」と実践事例の分析方法

4. 1. 本単元で設定された「概念」と具体的な到達度の考え方

教師は、本単元について、「私たちは誰なのか」のテーマと関連づけるために自分自身が抱えている問題意識を歌にするという、ブルースの特徴を活かした構成にしたと述べている。また、教師は、「特徴、機能、原因、変化、関連、ものの見方、責任、振り返り」という8つの概念の中でも「機能」と「ものの見方」に焦点を当てて単元を設計したと言う。

本単元では、教師は、単元を通して児童が探究すべき事項と関連づけて概念が記された「探究の流れ」(表4)を作成していると言う。さらに「探究の流れ」に記された事項の実現を目指して実践することが児童の概念理解を促すことになると教師は述べる。

表4 「探究の流れ」

<p>【探究の流れ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童は、楽器を通して表現する（機能） ・異なる楽器の規則を知る（ものの見方）

また、教師は、本単元において各概念の理解ができているか否かの基準（到達度）について次のように設定している。

- ・「機能」を理解する：児童が楽器を通して表現するための奏法を知ること。
- ・「ものの見方」を理解する：2つ以上の楽器の奏法の違いを知ること。

図1は、本単元において設定されている「教科の枠をこえたテーマ」と「概念」をPYPのメカニズムの観点から示したものである。次に図1に基づく実践事例の分析方法を検討する。

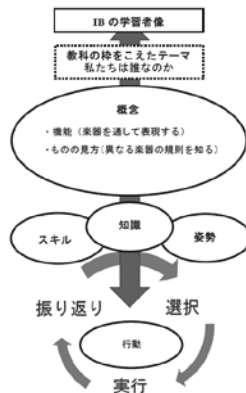


図1 PYPのメカニズムと本単元において設定された「教科の枠をこえたテーマ」および「概念」

4. 2. 概念に焦点を当てた事例分析の方法

「PYPのつくり方：初等教育のための国際教育カリキュラムの枠組み」には、教師と児童の間で行う「問い」が例示されており、それらの「問い」は児童が探究を通して概念を理解する上で支えになるものとされている（pp.154-155）。しかし、PYPに限らず音楽の授業の事例分析においては、必ずしも「問い」のみに着目することで授業事例の本質を捉えられるとは限らない。例えば、小川・早川・古山・井本（2022）による小学校音楽科における教師の指導方法の分析では、収集した事例から指導言を抽出・カテゴリー化した後に考察することで、熟達した教師の指導方法における「ことば」の場面ごとの役割について分析し、授業事例の解釈に成功している。現場では、その単元の性質に応じて問いを中心に指導を構成しない場合も考えられる。実際に、本事例においても概念理解を促す問いの活用は見られず、指導言を中心に構成されたものであった。このような場合には、PYPの授業事例であっても問いではなく、小川らの研究と同様、指導言の性質一つ一つに着目していくことが有効であると考えられる。そこで、本研究でもこの分析方法をベースに指導言を教師の単元設計や概念・到達度の設定をもとに抽出・カテゴリー化する。そして、その指導言の役割についてカテゴリーに基づき考察することで概念の理解へと導くための手法とその実際の効果を明らかにしたい。

5. 各概念に応じた授業事例の分析

表5-①には、本單元における学習内容、表5-②には、抽出できた指導言のカテゴリーを示している。本研究では、観察した場面にに基づき作成したトランスクリプトより、概念の理解を促すための指導言を抽出し、表5-②の通りカテゴリー化した。表4の「探究の流れ」に記された「機能」「ものの見方」を視点とし、「機能」の理解を促すための指導言は、「コードの奏法に関する説明」や「コードの奏法に関する復習」、「コードの変換に関する説明」や「コードの変換に関する復習」にカテゴリー化された。さらに、「ものの見方」の理解を促すための指導言は、「楽器ごとの奏法に関する説明」にカテゴリー化された。

本章では、5.1において「機能」の理解を目的とした指導言、5.2において「ものの見方」の理解を目的とした指導言について分析する。

表5 ①主な学習内容と②抽出できた指導言のカテゴリー（P. 111へ続く）

	授業日	①学習内容	②抽出できた指導言のカテゴリー
1	1月14日	1. ウクレレの調弦方法 ・ 1弦のラの音をチューナーで調弦する ・ 2弦ミ, 3弦ド, 4弦ソの音を調弦する 2. コードCの奏法 ・ コードCを弾くための指使いについて ・ 《Are you strumming》に合わせてコードCを弾く	【コードCの奏法に関する説明-機能】
2	1月28日	1. 「ブルース」について ・ BB. Kingの《One Shoe Blues》を聴く ・ 《One Shoe Blues》における歌詞の内容について ・ Zoomのブレイクアウトルームで「ブルース」の歌詞を児童同士でペアを組んでつくる	

3	2月4日	<p>1. コードCの復習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・《Are you strumming》を歌いながらコードCを弾く <p>2. コードFの奏法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コードFを弾くための指使いについて ・コードFからコードCへの変換について ・《Yellow Submarine》に合わせてコードFとコードCを弾く 	<p>【コードCの奏法に関する復習①-機能】</p> <p>【コードFの奏法に関する説明-機能】</p> <p>【コードFからコードCへの変換に関する説明-機能】</p>
4	2月11日	<p>1. コードFからコードCへの変換に関する復習①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コードFの奏法 ・コードCの奏法 ・コードFからコードCへの変換について ・《Yellow Submarine》に合わせてコードFとコードCを弾く <p>2. コードC7の奏法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コードC7を弾くための指使いについて ・コードFからコードC7への変換について ・《The Hokey Pokey》に合わせてコードFとコードC7を弾く <p>3. コードAmの奏法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コードAmを弾くための指使いについて ・《Run Through Jungle》に合わせてコードAmを弾く 	<p>【コードFの奏法に関する復習①-機能】</p> <p>【コードCの奏法に関する復習②-機能】</p> <p>【コードFからコードCへの変換に関する復習-機能】</p> <p>【コードC7の奏法に関する説明-機能】</p> <p>【コードFからコードC7への変換に関する説明-機能】</p> <p>【コードAmの奏法に関する説明-機能】</p>
5	2月25日	<p>1. コードCからコードFへの変換に関する復習②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コードCの奏法 ・コードFの奏法 ・コードFからコードCへの変換について ・《Yellow Submarine》に合わせてコードFとコードCを弾く <p>2. コードGの奏法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コードGを弾くための指使いについて <p>3. CFGCの順番にコードを変換しながら弾く方法について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・《Three Little Birds》に合わせてCFGCを弾く 	<p>【コードCの奏法に関する復習③-機能】</p> <p>【コードFの奏法に関する復習②-機能】</p> <p>【コードFからコードCへの変換に関する復習-機能】</p> <p>【コードGの奏法に関する説明-機能】</p> <p>【コードCFGCの変換に関する説明-機能】</p>
6	3月4日	<p>1. グループ分け</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽器分担に関する説明 ・発表に向けたグループ決め ・楽器分担決め <p>2. グループごとに「ブルース」の歌詞制作</p>	
7	3月11日	<p>1. グループごとの練習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ブルースのコード進行について ・楽器の奏法 	<p>【ブルースのコード進行に関する説明-機能】</p> <p>【楽器ごとの奏法に関する説明①-ものの見方】</p>
8	3月18日	<p>1. グループごとの練習</p> <p>2. 代表グループの中間発表</p>	<p>【楽器ごとの奏法に関する説明②-ものの見方】</p>
9	4月1日	<p>1. グループごとの練習</p> <p>2. 代表グループの中間発表</p>	<p>【楽器ごとの奏法に関する説明③-ものの見方】</p>

5. 1. 「機能」の理解を目的とした指導言

表6は、表5-②「抽出できた指導言のカテゴリ」の中から「機能」の理解を目的とした指導言をまとめたものである。教師は、ウクレレの奏法における基礎段階として「コードの奏法に関する説明」と「コードの奏法に関する復習」を、応用段階として「コード変換に関する説明」と「コード変換に関する復習」を行っている。これらの一連の指導は、最終的にブルースのコード進行のためのコード変換の習得を目的として実施されたものである。

表6 「機能」の理解を目的とした指導言と本研究での例示箇所の一覧

	月日	①抽出できた指導言のカテゴリ	②本研究での例示箇所	
1	1月14日	コードCの奏法に関する説明	表7	
3	2月4日	コードCの奏法に関する復習①	表8	
		コードFの奏法に関する説明		
		コードFからコードCへの変換に関する説明	表9	
4	2月11日	コードFの奏法に関する復習①	表10	
		コードCの奏法に関する復習②		} [A]
		コードFからコードCへの変換に関する復習①		
		コードC7の奏法に関する説明		
		コードFからコードC7への変換に関する説明		
		コードAmの奏法に関する説明		
5	2月25日	コードCの奏法に関する復習③	} [B]	
		コードFの奏法に関する復習②		
		コードFからコードCへの変換に関する復習②		
		コードGの奏法に関する説明		
		コードCFGCの変換に関する説明		
6	3月11日	ブルースのコード進行に関する説明	表11	

基礎段階におけるコードの奏法に関する説明と復習、および応用段階におけるコードの変換に関する説明と復習の中でも表6に示した【A】と【B】以外の場面での指導は、同じ手順で行われている。そのため、本研究では、一例として「コードCの奏法に関する説明」と「コードCの奏法に関する復習①」、「コードFからコードCへの変換に関する説明」、一連の説明と復習の最終目的である「ブルースのコード進行に関する説明」場面を取り上げる。

さらに、【A】と【B】の場面での指導では、「コードFからコードCへの変換に関する復習」を実施する過程で「コードFの奏法に関する復習」や「コードCの奏法に関する復習」も行っている。教師は、【A】の場面でコードFからコードCへの変換を児童全員ができていたことを把握したため【B】の場面では、詳細な復習はせずに振り返りを行う程度に留めている。そのため、本研究では、詳細な復習が行われている【A】の場面を取り上げる。なお、表6-②には、指導場面の詳細が例示されている箇所（表）を示してある。次に表6の網掛け箇所の分析を行う。

5. 1. 1. コードCの奏法に関する説明と復習

表7は、「コードCの奏法に関する説明」場面である（以後、括弧内は教師・児童の動きを示す）。

表7 コードCの奏法に関する説明（1月14日）

- | |
|---|
| 1) 教師：これは、コード。これは、フレット（前方にあるホワイトボードに映し出されたコードCを弾くための指使いが記された画面を指しながら）フレット1、フレット2、フレット3、フレット4
いい？フレット3を押さえてコードCを弾く（前方でコードCの押さえ方を丁寧に見せながら） |
| 2) 児童：（コードCを弾く） |
| 3) 教師：聞いて！（《Are you strumming》に合わせてコードCを弾く）（模奏した後で）皆で弾きましょう。 |
| 4) 児童：（曲に合わせてコードCを弾く） |

教師は、1)のように教室の前方にあるホワイトボードへ映し出されたウクレレの写真を指しながら説明している。教師は、「これは、コード。これは、フレット」とホワイトボードに映し出されたウクレレの写真や教師が持っているウクレレを実際に見せながらウクレレの仕組みについて伝えている。また、コードCを弾くための指を押さえて見せながら、コードCの奏法について説明している。その模範をもとに児童は、2)のようにコードCを自身でも鳴らし、さらに教師の曲に合わせた模奏に基づいて、実際に4)のように曲の中でコードを奏でている。

表8は、「コードCの奏法に関する復習」場面である。

表8 コードCの奏法に関する復習①（2月4日）

- | |
|---|
| 1) 教師：コードCの復習をします。使うのは、薬指（薬指を見せて）一本です。薬指を使います。児童1 Go！ |
| 2) 児童1：（コードCを弾く） |
| 3) 教師：次、児童2！ |
| 4) 児童2：（コードCを弾く） |
| 5) 教師：（一人一人の児童を当て、コードCを弾かせることで、できるか確認している）…〈中略〉児童3！ |
| 6) 児童3：（コードCを弾くができていない） |
| 7) 教師：児童3を助けてあげて（周りにいる児童に対して呼びかける）…〈中略〉児童4！ |
| 8) 児童4：（コードCを弾くができていない） |
| 9) 教師：（指使いを個人的に教える。その後、皆でコードCを弾くように伝える）。私の真似をして！（コードCを4回弾く） |
| 10) 児童：（コードCを4回弾く） |
| 11) 教師：（コードCを4回弾く） |
| 12) 児童：（コードCを4回弾く） |
| 13) 教師：（《Are you strumming》を流す。歌いながらコードCを弾く） |
| 14) 児童：（曲に合わせてコードCを弾く） |
| 15) 教師：もう一度弾きましょう。ワンツーレディゴー |
| 16) 児童：（曲に合わせてコードCを弾く） |
| 17) 教師：ソロで弾いてくれる人！よし、児童1。歌って弾いて！ |
| 18) 児童1：（コードCを弾きながら歌う） |
| 19) 教師：（拍手をする）他にいる？児童3！ |
| 20) 児童3：（コードCを弾くが、指の位置がずれていた） |
| 21) 教師：コードC！（児童3が押さえている指の位置が違ったため、周りの児童が教える） |
| 22) 児童3：（コードCを弾きながら歌う） |
| 23) 教師：ありがとう！ |

教師は、コードCの奏法に関する復習として、児童全員がその奏法を習得できているか確認するために、児童一人ずつにコードCを弾かせている。その中で、コードCが弾けていない児童に対しては、1) から9) のように周りの児童に教えてもらうように伝えたり、個人的に指導をしたりしている。《Are you strumming》は、児童がメロディーに合わせて1拍ずつコードCを弾く楽曲構成になっている。教師は、9) から23) のように、各児童がコードCの奏法を確認した後で楽曲に合わせて独奏させている。教師は、その後17) のように、挙手した児童を当て《Are you strumming》を一人で弾き歌いさせている。発表した児童1は、弾き歌いができていたため、19) のようにその演奏に対して賛辞を与えている。一方、その次に発表した児童3は、指の位置がずれていて正しくコードCを押さえることができていなかったため、21) のようにコードCの奏法を周りの児童が教えた後に再度、22) のように《Are you strumming》を独奏させることによって、コードCの奏法を正しく習得しなおしたことを確認している。

5. 1. 2. コードFからコードCへの変換に関する説明と復習

表9は、「コードFからコードCへの変換に関する説明」場面である。

表9 コードFからコードCへの変換に関する説明（2月4日）

1) 教師：今から、コード変換する方法を教えます。これは、コードF。弾いてみて。次は、コードC。最初に学びましたね。4回弾いて、4回休めます(ホワイトボードに映された楽譜を指しながら)。今から見せますね(コードF4回、休み4回、コードC4回、休み4回の順に演奏している様子を見せる)。一緒に弾いてみよう。
2) 児童：(教師の真似をして、コードF4回、休み4回、コードC4回、休み4回の順に演奏する)
3) 教師：次は、コードFを8回、コードCを8回弾く。こちらを見て(演奏している様子を見せる)。いいかな?ワンツレディゴー
4) 児童：(教師の真似をして、コードFを8回、コードCを8回弾く)
5) 教師：OK!聴いて!《Yellow Submarine》の音源を流し、歌いながらコード変換している様子を見せる)
6) 教師：コードFを4回、コードCを8回、コードFを8回弾く。やってみよう(音源を流す)
7) 児童：《Yellow Submarine》に合わせて弾く)
8) 教師：弾いてくれる人
9) 児童：(手を挙げる)
10) 教師：児童5!
11) 児童5：(弾いて見せる)
12) 教師：すばらしい!次、児童1!
13) 児童1：(弾いて見せる)
14) 教師：Good!私の話を聴いて(全ての児童に対して)。親指で圧力をかけないといい音が出ないよ(例を見せながら)

《Yellow Submarine》は、コードFとコードCを交互に弾くことで表現できる楽曲として取り上げられている。教師は、1) から6) において、コードFからコードCへの変換方法について実際に指使いを見せながら児童に伝えコードFとコードCへの変換を《Yellow Submarine》に合わせて反復練習をさせることで、コード変換の奏法の習得へ確実に導こうと試みている。

教師は、児童がコード変換に慣れてきた様子を確認した後に、例を見せてくれる児童がいらないか聞

き、挙手した児童5と児童1を当てている。教師は、12)のように児童5の演奏に対してよい評価を伝えている。一方で児童1は、よい音を出せていなかったことから、14)のように教師はよい音を出す改善策を児童1だけでなく、児童全員に教えている。

表10は、「コードFからコードCへの変換に関する復習」場面である。表10の1)から16)の場面において、教師は、コードFとコードCの奏法の復習も行い、コードFとコードCを正しく押さえられて

表10 コードFからコードCへの変換に関する復習①(2月11日)

- | |
|--|
| <p>1) 教師：これを弾いてみましょう(コードFを弾く)
 2) 児童：(真似してコードFを弾く)
 3) 教師：OK！静かに！(コードFの指使いを見せる)
 4) 児童：(真似して弾く)
 5) 児童不明：このように弾けばよい？
 6) 教師：(返事をする)
 7) 児童：(真似して弾く)
 8) 教師：OK！ストップ！ストップ！これがF(指使いを見せながら)これがC(指使いを見せながら説明する)
 9) 児童：(コードCを弾く)
 10) 教師：(一部、コードCの指を押さえきれていない児童に対して)薬指！薬指！よし、弾いてみよう(カウントしながらコードFを弾き始める)
 11) 児童：(真似をする)
 12) 教師：静かに！Fを4回、Cを4回。弾くのをやめて！聴いて！(コードFを4回、コードCを4回弾いて見せる)弾いてみよう。ワンツーレディゴー！
 13) 児童：(コードFを4回、コードCを4回、コードFを4回、コードCを4回弾く)。
 14) 教師：OK！聴いて。弾かないで。聴いて(演奏をやめて聴くように、そしてその後コードFの指を準備するように指示する)
 15) 児童：コードFを4回、コードCを4回、コードFを4回、コードCを4回、コードFを4回、コードCを4回弾く)
 16) 教師：(コード変換が上手くできていない児童を個別に指導する)。コードF4拍を4回、コードC4拍を8回弾く(《Yellow Submarine》の楽譜を前方のホワイトボードに示しながら)。
 17) 児童：(《Yellow Submarine》を歌う)
 18) 教師：(児童の歌に合わせてコードを言う)ストップ！今からお手本を見せます。私を見て(手本を見るように言う)(コードを言いながら《Yellow Submarine》を弾く)ゆっくり弾いてみましょう！
 19) 児童：(《Yellow Submarine》を弾く)
 20) 教師：もう一度弾いてみましょう！
 21) 児童：(《Yellow Submarine》を弾く)
 22) 教師：ソロで弾いてくれる人！
 23) 児童：(挙手をする)
 24) 教師：児童1、Go！
 25) 児童1：(弾いて見せるが、コードCからコードFへの変換が分からず途中で止まってしまう)
 26) 教師：(止まった箇所の指使いを再度伝える)
 27) 児童1：(修正して、途中から弾き始める)
 28) 教師：ソロで弾いてくれる人！児童3！
 29) 児童3：(弾いて見せるが途中で止まりながら)
 30) 教師：OK！Good！児童6、Go！
 31) 児童6：(弾いて見せる)
 32) 教師：OK！とても素晴らしい！児童5、Go！
 33) 児童5：(弾いて見せるが途中で止まりながら)
 34) 教師：いいね！皆で一緒に弾きましょう。
 35) 児童：(《Yellow Submarine》を弾く)</p> |
|--|

いない児童に対して個別に指導を行っている。1) から11) の場面のように、コードFとコードCの奏法という基礎段階まで遡って復習している様子から、コードFからコードCへの変換を確実に定着させるという教師の指導意図が窺える。

16) から33) の場面において、教師は、児童全員に一齐に《Yellow Submarine》を2回弾かせた後、挙手した児童を当て、独奏させている。18) の場面でもよい音を出せていなかった児童が見受けられた際に、教師がよい音を出す改善策を教えていた。コードFを押さえることができていなかった児童がいたため、26) の場面で教師が実際に前方で改めて指使いを見せながら教えている。

児童に対する評価が明確に見られた例としては、コード変換がスムーズにできていた児童6に32) のように賛辞を与えている。一方、児童5は、表9でも同じように全児童の前で例を見せたときはできていたが、33) の場面ではスムーズにコード変換ができていなかった。さらに、児童3もスムーズにコード変換ができていなかった。そのため、30) および34) の場面では、教師は児童6に対して与えていた32) のような賛辞までは与えていない。

このように、個別の児童の達成度としては細かな課題も見られたが、これらの一人一人の評価の過程を経てからの最後の一齐演奏では、児童はウクレレでのコード変換に迷う様子を見せることもなく弾いている。

次にコードの変換に関する一連の説明や復習の最終目的とされる「ブルースのコード進行に関する説明」場面を取り上げる(表11)。なお、同日のこの場面の前の週には、表5に示しているように合奏に向けたグループ分けがなされている。グループ分けの内容については次節にて述べるが、この段階でウクレレを選択し担当することになった児童は限られており、表11での指導はこの限られた児童を対象にしたものである。

表11 ブルースのコード進行に関する説明(3月11日)

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1) 教師：4小節あります(ホワイトボードに記された写真1を指しながら)それぞれの小節には、4拍入ります。最初は、コードC4小節分弾く。このように弾く(カウントしながら弾いて見せる)いいかな?コードCを弾く準備をして。ワンツーレディゴ2) ウクレレを担当する児童:(教師に合わせてコードCを弾く)3) 教師：ストップ。次の段に移って、コードFを2小節弾いて、次にコードCを2小節弾く(カウントしながら弾いて見せる)では、2段目から。ワンツーレディゴ4) ウクレレを担当する児童:(教師に合わせてコードFとコードCを弾く)5) 教師：コードFを2小節という意味は…(弾けていない児童がいたため、再度、弾いて見せる)ワンツーレディゴ6) ウクレレを担当する児童:(教師に合わせてコードFとコードCを弾く)7) 教師：次、3段目。コードFを1小節弾く。コードG7を1小節(初めて出てくるコードG7の押さえ方・弾き方を実演する。できていない児童を個別に指導する)最後にコードCを2小節弾く(弾いて見せる)では、一緒に。ワンツーレディゴ8) ウクレレを担当する児童:(教師に合わせてコードFとコードG7とコードCを弾く)9) 教師：最初から。ワンツーレディゴー10) ウクレレを担当する児童:(教師に合わせて弾く)11) 教師：最初!ワンツーレディゴ(歌をうたいながらウクレレを弾く)12) ウクレレを担当する児童:(教師に合わせて弾く)13) 教師：それぞれのコードを違った弾き方で弾くこともできる!(リズムを変えて弾いて見せる)質問はある?大丈夫?理解したかな?14) ウクレレを担当する児童:(頷く) |
|---|

教師は、表12に示したブルースのコード進行について、ウクレレを担当する児童のみ集めて教えている。教師は、表12の「ブルースのコード進行」の詳細について1)のように最初に説明した後で、1)から8)の場面のように、1段ずつ説明→実演→児童の独奏の順にブルースのコード進行について指導している。

ブルースのコード進行の中には、本単元で扱っていない新たなコードG7がある。教師によるG7の奏法の指導は、7)の場面で1度教えたのみであるにも関わらず、ウクレレを担当する児童は、8)の場面のように正しく弾くことができていた。この様子から、ウクレレを担当することになった児童は、新たなコードであっても教師の少ない模範演奏や個別指導から習得できる程度には、ウクレレの基本奏法を習得できていたことが分かる。

表12 ブルースのコード進行

C	C	C	C
F	F	C	C
F	G7	C	C

5. 2. 「ものの見方」の理解を目的とした指導言

本節では、表5-②「抽出できた指導言のカテゴリー」の中でも「ものの見方」の理解を目的とした指導言を分析する。第6回以降の授業では、グループごとの合奏活動に主眼が置かれている。第6回の授業において、まず教師は、児童がグループに分かれる前にグループごとの合奏で扱う楽器について説明している。その後、グループが、教師ではなく児童によって決められる。グループは、歌1名、ウクレレ1名から2名、打楽器1名から2名の、合計3～4名の児童で構成され、全部で5つのグループになっている。その後教師は、第7回（3月11日）以降の授業では、グループを回りながらそれぞれの児童が担当する楽器の奏法に関して指導している。その指導は、グループに関係なく同じ方法で実施されていたため、楽器ごとの奏法に関する説明が行われた第7回から第9回の授業の中から一例として、第8回「楽器ごとの奏法に関する説明②」(3月18日)の授業内における事例（グループ1）を取り上げる。

表13 楽器ごとの奏法に関する説明②（3月18日）

- 1) 教師：（グループ1の打楽器を担当する児童7にスネアドラムとシンバルの叩き方を教える。例を見せる）
- 2) 児童7：（教師の真似をしてスネアドラムとシンバルを叩く）
- 3) 児童5：（児童7にリズムの打ち方を教える）できた！
- 4) 教師：OK！最初のカウントをして（児童7に指示をする。教師は、ウクレレを弾く）
- 5) 児童7：（ドラムスティックを利用してカウントする）
- 6) グループ1の児童：（合わせる）
- 7) 児童5：（途中で児童7のリズムが気に入り、リズムの取り方を再度伝える）
- 8) 児童5：（スネアドラムとシンバルを叩く）
- 9) 教師：（歌のリズムを児童8に教える。ウクレレを担当する児童5に対して）児童5、OK！ちょっと来て！（グループ全員に対して。歌詞が書いてあるパソコンを見せながらリズムを取るタイミングを教える）
- 10) 教師：（児童7に対して）いいかな？もう一度、カウントして。
- 11) 児童7：（カウントをする）
- 12) グループ1の児童（合わせる）
- 13) 教師：（歌をうたっている児童7にリズムを教えながら）
- 14) 児童7：（教師が刻む拍とは少しずれてしまう）
- 15) 教師：（演奏後）OK！

このグループは、3人で構成されている。児童7がスネアドラムとシンバル、児童5がウクレレ、児童8が歌を担当している。教師は、スネアドラムとシンバルの叩き方について例を見せながら教えたり、歌におけるリズムの取り方を教えたりしている。教師は、9)のように歌詞が書かれた画面を見せ、リズムの取り方をグループ1の児童全員に共有することで、リズムが合うように調整しようと試みている。また、児童5は、3)のように児童7に対してスネアドラムとシンバルの奏法を教えており、担当しない楽器の奏法も把握していることがこの様子から推察される。そして、グループで合奏する際には、4)のように教師もウクレレで参加し、安定した拍を刻むことで、児童に担当楽器ではない他の楽器と合わせられるように導いている。児童7においては、14)のように合奏をする際に、教師が刻む拍と児童7が叩くリズムとは、少しのずれが見られたものの、教師がグループに介入した直後よりもスネアドラムとシンバルで正確にリズムを叩くことができるようになっており、技能面の改善がみられた。児童7においては、グループ合奏の前にウクレレを弾くこともできており、教師が介入することによって、スネアドラムとシンバルのリズムを正確に叩くことも可能になっていた14)。そのため、児童5と児童7は、2つ以上の楽器の奏法の違いを認識できていたことになる。しかし、歌を担当していた児童8においては、担当が楽器ではなく、歌であったため、必ずしも、2つ以上の楽器の奏法の違いを知ることができていたとまでは言えない。

6. 概念理解の促進の観点から見た指導言の役割の考察

本章では、他の基本要素の習得の成果が表れるとされる児童の「行動」に着目し、単元を通した「機能」および「ものの見方」の習得状況を示す。そして、その状況に基づき、概念の理解へと導く手法とその達成度について考察する。先述の通り教師は、表4のように、各概念を理解できていると見做す基準について、「『機能』を理解する」とは、「児童が楽器を通して表現するための奏法を知ること」、

「『ものの見方』を理解する」とは、「2つ以上の楽器の奏法の違いを知ること」であると設定している。

6. 1. 「機能」の理解へと導く手法

教師は、「コードCの奏法に関する説明」(表7)や「コードFからコードCへの変換に関する説明」(表9)、「ブルースのコード進行に関する説明」(表11)を行う際に、必ず教室の前方で実演をしながら説明を行っている。教師は、授業を通して、「実演を伴う説明」をすることで、本単元で設定されている概念の一つである「機能」の理解へと児童を導こうと試みていることがこの様子から窺える。

また教師は「コードFからコードCへの変換に関する復習」(表10)場面において「コードFからコードCへの変換に関する説明」(表9)で指導した内容のみを復習するのではなく、コードFやコードCの基礎的な奏法へ遡って復習を行っていた。基礎的な奏法にまで遡り復習を行っている様子から教師は、児童の「機能」の理解をより着実なものにしようと試みているものと考えられる。

さらに教師は、実演を伴う説明場面や復習場面で、挙手した児童に独奏させ、その演奏に対して評価を行っている。これは教師が児童に教えた奏法の児童による実演を通じて、どの程度、児童が概念の一つである「機能」を理解しているのか、その指導の達成度合いを評価することに対応する。また教師は、指導意図の達成度合いを評価し、他の児童にも共有することで、実演者のみならず児童全員の「機能」の理解へとさらに導くことを試みていると考えられる。

「実演を伴う説明」や「基礎段階も踏まえた復習」を児童全員で一斉に行っても、正しく演奏できていない児童が一定程度見られていたのに対し、さらに「指導意図の達成度合いの評価」を行うことによって、最終的には、個々の児童だけではなく、児童全員がウクレレを演奏することができていた。このような児童の様子から、一連の手法は、「機能」の理解を促すのに十分に有効であることが示唆された。

6. 2. 「ものの見方」の理解へと導く手法

教師は、「楽器ごとの奏法に関する説明」(表13)場面において、リズムの捉え方を共有し、グループ内の合奏に加わり、安定した拍を刻むことによって、教師がグループに介入した直後よりも演奏が合うようになっていた。先述の例のみならず、他の4グループでも、中間発表の際に、児童同士が互いに意識してリズムを合わせる演奏はおおむねできていた。しかし、グループ1でウクレレを選択していながら打楽器を担当する児童に奏法を教示していた児童5のように、他の4グループでもウクレレ以外の楽器の奏法を理解していた児童がいたかは定かではない。さらに、グループ1の児童8のように歌を担当していた児童においては、ウクレレ以外の楽器をこの単元では習得していないことから、必ずしも2つ以上の楽器の奏法の違いを知ることができていたとまでは言えない。このような成果から、児童のみによる合奏を形づくっていくことにより「ものの見方」の理解へと導くには、「教師の合奏への介入」が5グループ全てのウクレレを担当する児童を中心に、一定程度有効であると示唆された。

7. 本研究のまとめと今後の課題

本研究では、PYP認定校における「音楽」の単元のうち、「私たちは誰なのか」というテーマに基づいた、ブルースを題材にした音楽づくりの単元についての事例分析を行った。その結果、「機能」の理解へと導く手法として、「実演を伴う説明」や「基礎段階も踏まえた復習」、「指導意図の達成度合いの評価」を一連で行うことによって、児童全員が「機能」を習得するのに十分に有効であることが示唆された。また、「ものの見方」の理解へと導くには、「教師の合奏への介入」が一定程度有効であることが示唆された。

本単元における指導では、PYPのメカニズムに即して図1のように概念に焦点を当てて実践されていた。一方、他の基本要素は、明示的に設定されておらず、単元設計と実践事例を紐づけて、習得状況を分析することは困難であるものの、今後のPYPの音楽における研究を進める上で、PYPのメカニズムの観点からの追究をすることにより、他の基本要素の習得についても新たな知見を得られる可能性もある。例えば本単元は、「機能」の理解を目的とした指導を行うことで、自身への課題へと接近させ、自己を表現するための手立てを考え身に付けさせることや、「ものの見方」の理解を目的とした指導を行うことで、他者理解を通して、メタ的に自身の演奏を認識させることにもつながりうるものであり、スキルの中でも、特に思考スキルを習得させる可能性のある実践と考えられる。また、児童は、ウクレレの仕組み、コードの押さえ方、他の楽器の仕組み、他の楽器の扱い方、ブルースに関連したコードネームを習得していた様子から、概念の理解を通じて、知識を習得させていた実践でもありと考えられる。さらに、本単元で児童は、自主的にグループを決め、グループごとに練習を重ねさせていた。このことから、本単元は、「協調」といった姿勢を培うことにもつながりうるものである。加えて教師は、本単元で児童にウクレレのコード進行を「選択」させ、ウクレレで表現させるという「実行」へ、そして、コード進行に対する「振り返り」といった行動が取れるように配慮していた。また、グループや合奏する際の楽器を児童に「選択」させ、最終的には、ブルースを題材とした音楽を発表させ、「実行」へと向かわせていた。このことから本単元は、「行動」のサイクルへとつながりうるものであると考えられる。

また、教師は、第9回の授業終了後のインタビューで本単元の課題について次のように述べている。

授業中に私があの子たちに「得意不得意があるから、上手くグループを組んでやりなさいよ。」と伝えたのに、上手くグループを組むことができていなかったね。

表13で例示したグループでは、教師による介入直後より演奏が合うようになっていたが、正確な演奏にまでたどり着くことはできていなかったため、教師による「上手くグループを組むことができていなかった」という発言はこの場面を振り返ったものであると推察される。教師が本単元における課題を踏まえ、「コミュニケーションスキル」を培うことを視野に入れた単元設計を行うことによって、児童はより効率的に自己を認識し表現できるようになり「IBの学習者像」の中でも「コミュニケーションができる人」への一層の接近が可能であることが考えられる。

なお、本研究で収集した事例は、「問い」以外の指導言中心で構成された単元であったために、小川らの手法を用いて分析を試み、概念理解に関する効果まで考察することができたが、一般的な国際バカロレアの事例においては必ずしもこの視点からの分析が適切とは限らない。そのため、今後、新た

な事例に基づいて分析する際は、本研究で採用した分析方法の適用も考えられる一方で、事例の内容によっては新たな分析方法を適用することも必要である。

また今後、本単元に限らず、PYP認定校での音楽全般の授業設計についてPYPの「教科の枠をこえたテーマ」への貢献と「IBの学習者像」の実現に関し、それぞれを考慮した授業設計とそれらの関係性の整理、そして各アプローチの接続を深めるなど、PYP認定校における音楽の授業に関する一般的な理論体系を整えていくことが必要である。そのためには、引き続き本研究のような参与観察により、まずは実践事例の研究を蓄積させることが重要である。それらの知見も活用しながら、授業者とともに授業を作り上げ、企画することで、一般的な理論体系の構築がさらに進み、一条校での実践を拡大させることが期待できる。

註

- 1 文部科学省IB推進コンソーシアム「IBとは」, インターネット,
<https://ibconsortium.mext.go.jp/>, 2022年9月23日最終アクセス
- 2 首相官邸 (2013)「日本再興戦略—JAPAN is BACK—」, インターネット,
https://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/saikou_jpn.pdf, 2022年9月23日最終アクセス, p.38
を参照
- 3 文部科学省IB推進コンソーシアム「認定校・候補校」, インターネット,
<https://ibconsortium.mext.go.jp/ib-japan/authorization/>, 2022年9月23日最終アクセス
- 4 小学校(一条校)の中で、聖ヨゼフ小学校が2018年に初めてPYPの認定を受けた。
聖ヨゼフ学園小学校「探究の時間」, インターネット,
<https://www.st-joseph.ac.jp/primary/education/ib.php>, 2022年9月23日最終アクセス
- 5 註3と同じ。
- 6 一条校のPYP認定校で勤務する教師へのインタビューによる。2021年5月17日に実施した。
- 7 文部科学省IB推進コンソーシアム「PYP(プライマリー・イヤーズ・プログラム)」, インターネット,
<https://ibconsortium.mext.go.jp/about-ib/pyp/>, 2022年9月23日最終アクセス
- 8 本稿と同じ著者による論文として、刊行予定
- 9 従来の日本語では「視点」と訳されていたが、原文をもとに再考し、本研究の文脈においてより適した表現となるように、ここでは「ものの見方」と訳している。
- 10 従来の日本語訳では「振り返り」と訳されていたが、原文をもとに再考し、本研究の文脈においてより適した表現となるように、ここでは「反省」と訳している。
- 11 従来の日本語訳では「行動」と訳されていたが、原文をもとに再考し、本研究の文脈においてより適した表現となるように、ここでは「実行」と訳している。
- 12 ビジネス・ブレイクスルー (2021)「『国際バカロレアに関する国内推進体制の整備』事業継続に関するお知らせ」, インターネット,
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000005.000059894.html>, 2022年5月15日最終アクセス

引用文献

- International Baccalaureate Organization (2018)「PYPのつくり方：初等教育のための国際教育カリキュラムの枠組み」, インターネット,
<https://www.ibo.org/contentassets/93f68f8b322141c9b113fb3e3fe11659/pyp-making-the-pyp-happen-jp.pdf>, 2022年9月15日最終アクセス, pp. 4-33を参照
- International Baccalaureate Organization (2017)「国際バカロレア (IB) の教育とは？」 インターネット,
<https://www.ibo.org/contentassets/76d2b6d4731f44ff800d0d06d371a892/what-is-an-ib-education-2017-ja.pdf>, 2022年10月9日最終アクセス, pp. 4-5を参照
- 稲生涼子 (2019)「国際バカロレアの音楽教育プログラムに関する研究『小学校学習指導要領・音楽づくり(第1学年及び第2学年)』と『プライマリー・イヤーズ・プログラム』の関連性に焦点を当てて」『音楽研究：大学院研究年報』 31, pp. 71-86
- 小川容子・早川倫子・古山典子・井本美穂 (2022)「音楽授業における達人教師の指導言 場面による『ことば』の意味」『岡山大学教師教育開発センター紀要』 12, pp. 181-195
- 安江真由美 (2017)「音楽教育におけるファシリテーターの役割 国際バカロレア (IB) 初等教育プログラム (PYP) と小学校学習指導要領の比較をもとに」『愛知学泉大学・短期大学紀要』 52, pp. 101-110.
- 安江真由美・松永洋介 (2016)「国際バカロレアにおける授業の目標設定についての一考察：音楽授業のモデルプランをもとに」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』 65, pp. 53-62

付記

本研究は、国立音楽大学の研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号2204）。